

恣意の空間と摂理の空間（その六）

——『序曲』第五巻の指笛の少年・覚え書き——

（一内と外と無限の空間一）

松 下 千 吉

I

はじめに『序曲』第五巻 (*The Prelude*, V. 389-422, 1805 ms.) の指笛の少年の一節の略歴をたどっておくと、1798年晩秋から冬にかけて Wordsworth がドイツの Goslar に滞在中に Lucy poems と前後して書かれ、翌1799年に *Ur-Prelude* ともいうべき二巻ものの草稿の一端として保留され、その翌年の1800年に *Lyrical Ballads* 第二版に収められ、その後1805年稿の『序曲』第五巻に組み込まれ、さらに1815年の『二巻詩集』 (*Poems in Two Volumes*) では “Poems of Imagination” という最も重要な項目の冒頭に置かれている。こうした経緯からみても、Wordsworth が終生きわめて大切に思っていた詩篇の一つであったと言える。

There was a Boy; ye knew him well, ye Cliffs
And islands of Winander!* —many a time,
At evening, when the stars had just begun
To move along the edges of the hills,
Rising or setting, would he stand alone
Beneath the trees, or by the glimmering Lake,
And there, with fingers interwoven, both hands

Press'd closely palm to palm, and to his mouth
 Uplifted, he, as through an instrument,
 Blew mimic hootings to the silent owls
 That they might answer him. —And they would shout
 Across the wat'ry Vale, and shout again,
 Responsive to his call, with quivering peals,
 And long halloos, and screams, and echoes loud
 Redoubled and redoubled; concourse wild
 Of mirth and jocund din! And when it chanced
 That pauses of deep silence mock'd his skill,
 Then sometimes, in that silence, while he hung
 Listening, a gentle shock of mild surprise
 Has carried far into his heart the voice
 Of mountain torrents; or the visible scence
 Would enter unawares into his mind
 With all its solemn imagery, its rocks,
 Its woods, and that uncertain Heaven received
 Into the bosom of the steady Lake.

This Boy was taken from his mates, and died
 In childhood, ere he was full ten years old.
 —Fair are the woods, and beauteous is the spot,
 The Vale where he was born; the Churchyard hangs
 Upon a Slope above the Village School,
 And there, along that bank, when I have pass'd
 At evening, I believe that oftentimes
 A full half-hour together I have stood
 Mute—looking at the Grave in which he lies.^①
 (*Winander = Windermere) (389-422)

一人の少年があった。ウインダミア湖の断崖よ、
 島々よ、そなた達は彼をよく知っていた！
 幾たびとなく黄昏^{なそがゆ}どきに、いち早く星々が

周りの山の端ぞいに、昇り、はた沈みつつ、
 見えはじめる頃、彼はいつもただ独り、木立の下に、
 また、ほの光る湖のほとりに、佇んでいた。
 そうして、両手の指を組み合わせ、
 両の掌をびったり寄せ合って口元に挙げ、
 笛でも吹き鳴らすように、ホウホウと
 吹き鳴らしては、沈黙するフクロウの応答を待った。
 すると、少年の呼び声に答えて、フクロウたちは、
 湖水の彼方の谷あいから、叫び返し、
 二度、三度と、鳴き返すのだった—
 ゆらぎ震える声、ながく伸びる声、甲高い叫び、
 そして、高らかな反響は反響を呼び、
 にぎやかな応答のすさまじい響もし。やがて、
 少年の技をあざむき挫くように、暫しの深い沈黙が訪れる—
 ときおり、そうした沈黙のさなか、少年がじいっと
 耳を澄ますと、穏やかな驚きの優しい衝撃とともに、
 ほとばしる谷川の水音が少年の心の遙か奥深くに
 さあっと運びこまれる、また、眼に見える光景が、
 その荘厳な万象とともに、不意に、
 われ知らず彼の心の中に入ってくるのだ—
 巖や、森や、はた、静まりかえる湖水深くに映る
 あの定かならぬ天空とともに。

この少年は十才にもならないうちに、
 友達から引き離され、幼くして身まかった。
 彼が生まれ育った里は、森さやかなる美わしの谷。
 教会の墓地が村の学校の上手の斜面に
 懸かるようにしてあった。そして、
 夕べなど、おりおり、私は、そのあたり
 土手みちをゆく道すがら、よく
 そこに半時間も佇んで、黙念と—
 少年の横たわる墓を見守っていたものだった。

Coleridge は Wordsworth からこの詩を受け取った時に「前半もさることながら、後半（11 or 16行目～）が一層気に入った……とりわけ “that uncertain Heaven received / Into the bosom of the steady lake” という詩行は、それがアラビアの砂漠で野放しになっているのに出会っても “Wordsworth だ” と即座に私は叫んだだろう」と書き送っている。^②

Wordsworth 自身は、後に1815年版『二巻詩集』の序文のなかで、自注として「私自身の幼少期の意識体験の一つを参考に、内なる情感が、外なる出来事と呼応して移り変わりつつ、音や光景のイメージを、想像力のこの世ならぬ土壌 (celestial soil) に不滅のものとして (for immortality) 移し植える状況を描き出してみた……少年はあの賑やかに響^{とよ}もす鳴き声が返ってくるのを、いくらか興奮して心もとない懸念 (restless anxiety) と共に耳をすまして待っている。その精神の緊張が緩みはじめる瞬間に、少年は不意に荘厳で心静まる形象 (solemn and tranquilizing images) を驚きと共に感受するのだ」と述べている。^③

少年は、自らの指笛の生み出す心はしゃぐ情景を楽しむうちに、その技の限りを尽くしても応答が途絶えるという、ささやかな自負の挫折を味わい、その挫折の不安・懸念という張りつめた情感がまさに緩もうとする瞬間に、穏やかな驚きの情感と共に、黄昏^{たそがれ}の森羅万象の音と光景が、不意に、そして一挙に心の奥深くに侵入してくるという、一種の啓示 (revelation) を体験するわけである。23行目の “With all its imagery” のあとの個々の事象の中に特に挙げられてはいないが、冒頭の詩行に見える山々の彼方の星々もその一つであることはいうまでもない。

啓示と言ったが、それは「穏やかな驚きの衝撃」という言葉はもとより、“unawares” 「不意に、我知らず」という一語にもよく現れている。この言葉は *Resolution and Independence* (1802) の中で、詩人が荒野で老いの極みの蛭取りの老人に、あたかも「恩寵か天啓のように」出会う情景でも用いられていて、いづれも忘れ難い印象を与えるのである。

Now, whether it were by peculiar grace,
 A leading from above, a something given,
 Yet it befell that, in this lonely place,
 When I with these untoward thoughts had striven,
 Beside a pool bare to the eye of heaven
 I saw a Man before me unawares:
 The oldest man he seemed that ever wore grey hairs.

• • •

Such seemed this Man, not all alive nor dead,
 Nor all asleep—in his extreme old age:
 His body was bent double, feet and head
 Coming together in life's pilgrimage;
 As if some dire constraint of pain, or rage
 Of sickness felt by him in times long past,
 A more than human weight upon his frame had cast.

(50-70)

さて、故あつての恩寵か、天上の導きか、
 はたまた、何かの賜物か、はからずも
 この寥々たる地で、私がかくも
 胸ふたぐ思^{あらが}いと抗っていると、
 天の光にさらされた沼のほとりで、
 不意に一人の男が^ま目のあたりに見えた、
 およそ白髪を頂く老いの極みの老人だった。

• • •

そのようにこの老人は見えた、老いの極みに、
 しかと生けるでも死せるでもなく、はた眠れるでもなく。
 今生の旅に五体は二重に曲がり、
 頭と足とが寄り合わさっている。

まるで、遠い昔に受けた苦しみの呪縛か、
 すさまじい病魔が、人の身には耐えがたい
 重荷を彼の身の上に科したかのように。

Wordsworth が「私の心眼には、この老人が寥々たる荒野をただ独り黙々とさまよいつづけるのが見えるように思えた」(In my mind's eye I seemed to see him pace / About the weary moors continually / Wandering about alone and silently. 129-131) と言うこのヒル採りの老人は、『旅ゆく老人』(*Old Man Travelling, or Animal Tranquility and Decay*) や『カンバーランドの老乞食』(*The Old Cumberland Beggar*), さらには、『序曲』第七巻のロンドンの雑踏の情景で語られる「盲目の乞食……その身じろぎもせぬ男の姿を、私はあの世からの諭しのように思いつつ、見つめた」(a blind Beggar ... on the shape of that unmoving man / ... I looked, / As if admonished from another world. 608-623) というあの盲目の乞食などと共に、Wordsworth の詩に現れる数ある天啓的な人間像の一つであることはいうまでもない。

なお“unawares”には、もう一つ Wordsworth ゆかりの情景がある。外ならぬ Coleridge の『老水夫行』(*The Rime of the Ancient Mariner*) の一節である。周知の筋書きではあるが、手短に言うと、南氷洋に漂流した若き日の老水夫が、水夫たちになつた^{あほうどり}信天翁を由われなく撃ち殺したために、南極の霊の復讐に遭い赤道帯の炎暑の海で二百人の同輩が甲板に倒れ死んだあとも、自分だけは死ねず、波間を泳ぐ海蛇たちを呪わずにはおれないという、霊的にも、肉体的にも「死中の生」(life-in-death) の状態にあったのが、ある月夜に恩寵の働きでその忌まわしい生き物たちを「不意に、われ知らず」祝福し、呪いが解けて、救いと償いが始まる全編の最頂点であり、最大の転換点である。なお、ここでは“s”のない形の“unaware”である。

O happy living things! no tongue
 Their beauty might declare:
 A spring of love gushed from my heart
 And I bless'd them unaware!
 Sure my kind saint took pity on me,
 And I bless'd them unaware.

The selfsame moment I could pray;
 And from my neck so free
 The Albatross fell off, and sank
 Like lead into the sea.

(282-291)

おお、幸いなる生き物たちよ！
 何びともその美しさを明かしは得まい。
 愛の泉がわが心より噴^{はと}ばしり、不意に
 われ知らず我は彼らを祝福せり！
 慈悲ぶかい聖者が我を哀れみ給い、
 われ知らず我は彼らを祝福せり！

たちまちに、我は祈るを得る、
 と、わが首からすると
 信天翁^{あほうどり}はほどけ落ちて、
 鉛のごとく海に沈めり。

この結びの「鉛のごとく海に沈めり」という情景に『出エジプト記』(Exodus, 15:10)の余韻が聞かれることは周知のことであるが、こうして、呪いの徴^{しるし}に老水夫の首に懸けられていた信天翁^{あほうどり}の死体は海にほどけ落ちるのである。Wordsworthは信天翁殺しの筋書きを助言したり、幾カ所かの詩行を提供したりして *Ancient Mariner* には深く関わっていたのであるが、④ “unawares” という言葉は *Lyrical Ballads* 第二版において、両詩人がほぼ同時期に書いた長短の

詩の啓示的な分脈で相並ぶわけである。Coleridge は *Biographia Literaria* : 14 章の冒頭で *Lyrical Ballads* の意図について、一彼自身は超自然的事象を通して、一方 Wordsworth は日常の事象を通して、自然と人間性の真実を写し出すことを目指す—という趣旨を述べているが、^⑤ この“unawares”もその趣旨をそれぞれの分脈で体现している。そういう意味で、少年の驚きの衝撃はささやかであるだけ一層、啓示の超日常性を含意することになるのである。

また、自注にある「心もとない懸念」というのは、Coleridge が称賛した二行の中の“uncertain”と、“while he hung / Listening”の“hung”という言葉に主として現れている。“uncertain”は「定かならぬ空」を指すのであるが、それも黄昏の湖面に映るから「おぼろで心もとない」のか、あるいは、黄昏でも湖面が“steady”であり、また普通に水面をいう場合は“on the bosom”，あるいはせいぜい“in the bosom”なのが、ここでは“into the bosom”とあるのだから、空の深みもきれいに映っているとすると、雲行きが定かならぬ「定めなき空」を指すのか、微妙である。どちらかといえば、後者の意味にとりたいのであるが、いずれにしても、空が“sky”でなくて“heaven”とあることも考え合わせると、それは同時に外なる宇宙が少年の恣意を越えた測り知れない世界であることの前感と不安をも暗に反映していると思われる。しかも、その「定かならぬ天空」を、その深さごと、懐ふかく受け入れる湖が「平静」であるというのは、自注に言う「莊嚴な心静まる自然のイメージ」の一端として「静穏で奥深い受容の心」、即ち同じ *Lyrical Ballads* の *Expostulation and Reply* に言う“a wise passiveness”をも暗に示唆していることにもなる。なお、ここでは“heart”と“mind”は意味が一つに重なり合い、そこにさらに湖が心の暗喩として重なっていると考えられる。湖水が心の暗喩となるのは、『序曲』第四卷(247-261)でボートの縁から水中を覗き込む情景にもあり、また、“heart”と“mind”と湖水とが、もう少し屈折した形で重なり合うのは、『序曲』第二卷(170-180)でフルートの得意な少年を湖の島に置き去りにした後の情景にも見

られる。

つぎに“hung”については、『序曲』第一巻で鳥の巣取りの少年が「断崖の頂き近く、一握りの草をつかみ、烈風にもたげられるようにしてぶら下がったとき」の情景が想起される。

Oh! when I have hung
Above the raven's nest, by knots of grass
And half-inch fissures in the slippery rock
But ill sustain'd, and almost, as it seem'd,
Suspended by the blast which blew amain,
Shouldering the naked crag; Oh! at that time,
While on the perilous ridge I hung alone,
With what strange utterance did the loud dry wind
Blow through my ears! the sky seem'd not a sky
Of earth, and with what motion mov'd the clouds!
(341-350)

ああ、あの断崖の叢生^{むらば}えの草の塊と
滑りやすい岩肌のわずかな裂け目に、かろうじて
つかまって、したたかに吹きまくる烈風に、ほとんど
もたげられるかの思いで、裸の岩を肩で担うように、
鳥の巣の上に危うくぶら下がったとき、
おお、あの危うい断崖にただ独りぶら下がったとき、
何という不思議な言葉を発しつつ、
唖々と唸る乾いた風が私の耳を吹きぬけたことか、
空はこの地上の常の空とは思えず、また、
雲々はなんという雲行きを見せたことか。

ここでは、物理的な危機が、同時に、内面的な緊迫とそれに伴う超日常的な知覚・認識状況を想像させる。Christopher Ricks も指摘するように“a sky of earth”の“earth”が「地球、此の世」(the earth, or Earth)とも四大元の一つ

としての「土、大地」(earth) ともとれる多義性のゆえに、少年の内面体験の超日常性がよりいっそう暗示されることになる。^⑥ 一方、指笛の少年の“hung”は、よく指摘されるように普通の詩人なら“stood”と言うところであろうし、物理的な意味では「じいっと動かないでいる」(remain without motion) という語義 (OED) が、ほぼ当てはまる唯一のものであるが、それでは覆いきれない内面的な含みがあるのが感じられる。Wordsworth は1815年版『二巻詩集』の序文で、*King Lear* (IV. vi) におけるドーヴァー断崖の浜セリ採りの情景描写や、*Paradise Lost* (II. 636-643) における混沌界の深淵を飛翔して新世界を探るサタンの情景描写、に見える“hang”の例をあげて、“Imagination”による把握が必要だと説いているが、^⑦ そのことは、無論、上にみた Wordsworth 自身の二例についても言えるであろう。指笛の少年の場合、それを「時間の一時停止」と取る批評家もあるが、むしろ逆に、時間が強く意識されるのではないか、とも思われる。^⑧ 最近では、Paul de Man が「あたかも、鳥たちと少年の意識とを結ぶ応答という堅固な地盤 (solid ground) が足元から抜け落ち、少年は天地の間に宙吊りになったかのようなようだ」という洞察的な解釈をしている。そして、これは de Man 一人ではないが、この“hung”がこの詩の結びの「丘の斜面に懸かる (hang) 教会の墓地」と呼応して「少年の死の予感」を暗示している、と解する批評家も少なくない。^⑨ いずれにしても、それが“uncertain”と照応して、自注でいう「心もとない懸念」を含意していることは否定できないであろう。

ところで、自注で「内なる情感が外なる事象と呼応して……」といい、また「想像力の此の世ならぬ土壤に不滅に……」ということからさらに思い出される言葉が一、二ある。一つは1802年版の *Lyrical Ballads* の序文の一節で、「アリストテレスによれば、詩はあらゆる書き物のなかで最も哲学的なものだという。その通りである。詩の目指すものは真実であり、その真実は個別的、局部的なものではなくて、普遍的で生動するものであり、外的な証言に立脚するの

ではなくて、情熱によって生きたまま心の中に運び込まれた真実である……詩は人間と自然のイメージである」という言葉である。

Aristotle, I have been told, hath said that Poetry is the most philosophic of all writing: it is so: its object is truth, not individual and local, but general, and operative; not standing upon external testimony, but carried alive into the heart by passion ... Poetry is the image of man and nature.¹⁰

自注の情感 (feelings) は強まれば情熱 (passion) に成るであろうし、真実は人の心に不滅に植えこまれるものであろう。そして “truth carried alive into the heart” というのは、この詩そのものの情景を指すものでもある。

いまひとつは、『序曲』第二巻で、幼児の心の成長について語る一節である。

For feeling has to him imparted strength,
And powerful in all sentiments of grief,
Of exultation, fear, and joy, his mind,
Even as an agent of the one great mind,
Creates, creator and receiver both,
Working but in alliance with the works
Which it beholds. —Such, verily, is the first
Poetic spirit of our human life;

(269-276)

なぜなら、情感が幼な子に力を分かち与え、
彼の精神は、悲しみ、有頂天、怖れ、喜び、
そうしたあらゆる情感を力強く感じつつ、
まさしく唯一の偉大な精神の代行者として創造する、
創造者であり、同時に、受容者であり、
それが見まもる自然の業と力を合わせて、
はじめてその業を成しとげる。まことに、

これこそ人生初の詩精神の芽生えなのだ。

我々の感知・認識作用は、精神が情感の光を通して、半ばは感受し、半ばは創造するものだというのであるが、同じ想念は周知のように *Tintern Abbey* (1798) の詩行でも「眼と耳が半ばは創造し、半ばは感知するもの」(what they half create, / And what perceive, 106-107) という言い方で語られている。

ところで、上の『序曲』の “as an agent of one great mind” について、M. H. Abrams 氏など三者共編の *Text* (1980) の注釈では、「このようにして、幼児の精神は単に神の精神の代行者であるばかりでなく、その創造性においては、神の精神の写し (reflection) なのだ」と述べている。^⑪ とすると、上の一節は、Wordsworth のより汎神論的な神と Coleridge のより正統的な神の観念の相違を別とすれば、*Biographia Literaria* : 13章の結びの「想像力」に関する周知の定義「無限なる存在、神、の永遠の創造行為が、有限な精神において反復されるもの (repetition) だ」という考え方に近いことになる。^⑫ いずれにしても、先の自注で「此の世ならぬ土壤に不滅のものとして植え付ける」というのも、このような思想の背景があつての意味だと思われる。

Wordsworth の自注に劣らず優れた注解を残したのは De Quincey である。De Quincey が湖畔地方に住んで Wordsworth 一家や Coleridge と親しくするのは1807年から1813年頃までで、Wordsworth が40才前後の数年間のことであり、また De Quincey の『湖畔詩人の思い出』(*Reminiscences of the English Lake Poets*) の Wordsworth に関する文章が書かれるのはその20数年後の1838年頃である。その中で De Quincey はこう語っている。

スペインの半島戦争の危機がせまる1808年頃、Wordsworth 38才前後のことであるが、Coleridge が London から取り寄せていた *Courier* という新聞を待ちかねて、深夜 Wordsworth と De Quincey 二人で峠まで駅馬車を迎えにゆき、Wordsworth は地面に耳をつけて長いあいだ聞いていた後、諦めて目をあげ、

暫くして言うには「注意を集中していた耳が突然その緊張から解放され始めた瞬間に、暗い稜線の上高くかかる星がふいに私の眼に入り、他の状況ではありえないことだが、私の認識・受容能力の全域 (capacity of apprehension) に無限なるものの情感をしみわたらせた」といって、さらに指笛の少年の詩を例証としてあげたというのである。

De Quincey はまた、彼自身も幾度か類似の啓示体験があったことを Wordsworth と語り合い、共感し合ったと述べているが、さらに指笛の少年の詩に言及して、「Wordsworth 自身はとくにことわってはいないが、人間の心と、それが自然の崇高な光景を反響し続けうる受容能力 (heart and its capacities) とに、無限の空間 (space and its infinitude) が内在することを言わんとするこの“far”という表現こそ、私にはいつも高遠な啓示の光のように感じられるのだ」と述べている。^⑬

このように、この詩の“carried far into his heart”，また序文の“truth carried alive into the heart by passion”，さらに自注の「荘厳で心静まるイメージ」などを重ね合わせて考えると、Wordsworth が指笛の詩とはほぼ同時期に詩人の理念を託して書いた *A Poet's Epitaph* の一節の「自らの心を観想しそこに憩う静かなる眼の収穫」という詩行の含蓄を多少とも推し測れるのではなかろうか。

In common things that round us lie
Some random truths he can impart,—
The harvest of a quiet eye
That broods and sleeps on his own heart.

(49-52)

有りふれた事物にひそむ折ふしの
真実を彼は分かち伝えることができる、—

おのが心を観想しそこに眠る
 静かなる眼の収穫を。

なおこの「静かなる眼」は *Tintern Abbey* で「調和の力と喜びの深い力により心^{なご}和んだ眼をもちて、我らは事物の生命を見通すのだ」(While with an eye made quiet by the power / Of harmony, and the deep power of joy, / We see into the life of things. 47-49) の「心^{なご}和んだ眼」に通ずるものであろう。

II

この詩はその啓示体験の過程を主として語っているので、それを自注と De Quincey の評釈に即して見てきたのであるが、Wordsworth が同様な体験を別の相から語る詩節を一、二見てみよう。一つは『序曲』第二巻で早朝散策の折りに、眼前の世界が心の内部の眺望のように見えたという一節である。

And before the vernal thrush
 Was audible, among the hills I sate
 Alone, upon some jutting eminence
 At the first hour of morning, when the Vale
 Lay quiet in an utter solitude.
 How shall I trace the history, where seek
 The origin of what I then have felt?
 Oft in those moments such a holy calm
 Did overspread my soul, that I forgot
 That I had bodily eyes, and what I saw
 Appear'd like something in myself, a dream,
 A prospect in my mind.

(361-371)

春ツグミの声もひびかぬ朝まだき、
 山あいの小高い頂にただ独り
 私は腰をおろした。谷あいには
 まったくひっそりと静かだった。
 そのとき私の感知したものの由来を
 いかに辿り、その根源を何処に求めゆけば
 よいのだろう。そうした折りにしばしば
 聖なる静穏が私の魂をおおいつつみ、
 私は肉眼のあることも忘れ、
 眼に見える事物は私の内に在るもの、
 夢か、心の中に広がる眺望、
 のように思われた。

ここでは、類似の体験の、過程よりは状態が、より原体験の心に近い素朴な
 観点から語られている。「私の中に在るもののように」と言うのは *Immortality*
Ode 第九連の周知の一節につながる想念である。この *Ode* の後半は、前半か
 ら数年たった1804年以後に書かれたことが分かっているから、指笛の詩より5
 年以上後になるのであるが、眼前の「事物が落ちてゆき、消えてゆくこと、真
 に把握できない世界を動きまわる生き物の莫然たる不安」という幼少体験にこ
 そ、感謝の歌を捧げるという一節である。

Not for these I raise
 The song of thanks and praise;
 But for those obstinate questionings
 Of sense and outward things,
 Fallings from us, vanishings;
 Blank misgivings of a Creature
 Moving about in worlds not realised.

(140-146)

これら（幼き日々の喜びや自由）のために、
 感謝の賛歌を捧げようというのではない。
 むしろ、感覚や外界の事物にまつわる
 あの頃のあの執拗な問いかけにこそ、
 事物が我らより落ちゆくこと、消えゆくことにこそ、
 確かと把握できない世界をさまよひ歩く
 生き物の莫然たる不安にこそ、捧げたいのだ。

この一節について Wordsworth は Fenwick 女史へのよく知られた自注でこう語っている。「私は外界の事物が自分の外に存在するものだと考えることが出来なくて、見るものすべてが私の霊的本性 (immaterial nature) に内在するものとして心を通わせた。通学の道すがら、この観念性の深みから目覚めるために、私はしばしば手で壁や木を掴んでみたほどである」というのである。また、別の知人には、「私の心 (mind) 以外のあらゆる事物が思惟 (thought) の中へと落ちてゆき、消えていった」とも語っている。^⑭

こうした体験は、常識的にいえば、思惟・観念が並外れて強すぎる上に、Wordsworth 自身が *Tintern Abbey* の詩行で「眼と耳の強大な世界」 (the mighty world / Of eye, and ear, 105-106) と言っているように、視覚や感覚も並外れて強かったからでもあろう。が、本質的にいえば、事物が見えるというのはどういうことか、眼に見える事物がそこに在り、それを見る主体がここに在るというのはどういうことか、という問題、即ち、知覚の神秘、認識の神秘、ひいては存在の神秘にかかわる体験である。そして、Wordsworth は上の一節のすぐ後で、こうした体験こそ「我らの生涯にわたる光の泉、我らの観照を司る光」 (the fountain light of all our day / ... a master light of all our seeing, 152-153) であり、「高遠な直観」 (high instincts, 147) であるという。

De Selincourt を助けて Oxford 版の良い Wordsworth 全詩集を編んだ Helen Darbishire は、先の『序曲』第二巻の「心の中の眺望」の一節について、17世

紀中葉の詩人 Thomas Traherne (1636-1674) の代表作の一つ *My Spirit* を読むことを勧めている。^⑤ Traherne はこの詩で、「私の存在の本質は受容能力であり」(My Essence was Capacity. 8), 「それ自身の中心に円やかな全領域がある」(In its own Centre is a Sphere. 16) といい、「眼前の自然万象が即、魂の内^{そく}に在り、喜ばしい実体として心に満ちわたる」という。

An Object, if it were before
Mine Ey, was by Dame Nature's Law
Within my Soul: Her Store
Was all at once within me; all her Treasures
Were my immediat and internal Pleasures,
Substantial Joys, which did inform my Mind.
(37-42)

事物は、たまたま眼前にあると、
大自然の法則のままに、
わが魂の内^{そく}に在った。森羅万象は、
そっくり即、わが心^{こころ}の内^{うち}に在って、
宝なす万象はわが心に直^{じか}に触れる喜び、
わが心に充ちわたる喜ばしい実体だった。

ここの Nature は “minister of God” としての「自然」であろうが、Oxford 版の Traherne 詩集の編者 Margolious も指摘するように、^⑥ Traherne の場合も、上のような幼児体験が回想を通して追認され、生涯にわたる観照の光となっていくのである。このほか、詩においてだけではなく、百篇ずつの短い瞑想文を集めたものである『瞑想の幾世紀』(*Centuries of Meditation*) 第二集75節の「天地、陸海の生きとし生けるものが創造主の賛美を歌う」という一節には、^⑦『序曲』第二巻(420-434)の「大気を打ち……陸地を走り……水中を泳ぐ生き物たちすべてが喜びの歌をうたう」という一節に近いものがあるなど、

少なからぬ類似点がある。Hereford の田舎の一牧師であった Traherne の草稿が London で発見されたのは19世紀末のことで、Wordsworth はその存在を知る由もなかったわけであるが、それだけに一層こうした類似性は両詩人の体験の純正さと普遍性の証しでもある。

内と外という観点から、指笛の詩に関連して、さらに触れておきたいのは *Tintern Abbey* のあの古典的な一節である。

And I have felt
 A presence that disturbs me with the joy
 Of elevated thoughts; a sense sublime
 Of something far more deeply interfused,
 Whose dwelling is the light of setting suns,
 And the round ocean and the living air,
 And the blue sky, and in the mind of man:
 A motion and a spirit, that impels
 All thinking things, all objects of all thought,
 And rolls through all things.

(93-102)

そして、私は感知したのだ、
 気高き思いの喜びで私の心をたちさやがせる
 ある存在を。いと遙かに深く遍ねく
 浸み透って在るもの—その住まう処、
 日ごと日ごとの夕日であり、円やかな大海原であり、
 生きてそよぐ大気であり、青く澄みわたる大空であり、そして
 人間の心の内にも住まうもの—の荘厳な気配を感知したのだ。
 思惟するものすべて、思惟の対象たるものすべてを
 生動させ、万象をつらぬいて巡りわたる
 在るそよぎ、ある靈気を。

“And” を積み重ねつつ静かに高まりゆく調べが描き出す情景を、John Jones

は「心を奪い取られるような光景」と評しているが、^⑭ここでは、耳目と心が「半ばは創造し、半ばは感受した」万象が、Wordsworth 独特の存在感をもってそこに在るのが感じられる。「沈みゆく夕日」が“suns”になっているのも、日々の情感に色どられた夕日を言うのであろうが、こうした情景は、Traherne の詩の風景が、みずみずしい情感に洗われてはいても、どちらかといえば、“Metaphysical poets”の特性の一端として、捨象的な傾向を見せるのとは対照的である。

ところで、「万象に遥かに深く遍在するもの」「ある霊」の「^{すみか}住処」が“light, ocean, air, sky”の場合は直接に“whose dwelling is the round ocean”という形で結ばれているのにたいして、“in the mind of man”の場合だけは“in”が付くことには、無論、韻律上の必要もあるだろうが、それだけではない要素があるように思われる。これに目を留める人も二、三あり、Donald Davie は“is the light of”などの場合は「……でできた住まい」(built of)であり、“in the mind of man”の場合は「……に備え付けの住まい」(built in)である、と言っている。^⑮また、Christopher Ricks は“in”とあると、「人間の心が最も暗く、最も深い大陸 (the darkest, the deepest of continents) であるかのようだ」と評した上で、あの De Quincey の「人の心の無限の空間」に言及している。^⑯この“continent”というのは「収める (contain) 容器」という古義、即ち、*Antony and Cleopatra* (IV. 14 : 40) でも「心よ、こたびこそ、お前の器 (たる肉体) よりも強かれ」(Heart, once be stronger than thy continent.) という文脈で用いられている古義を踏まえてのことであろうし、「暗く深い」というのは Wordsworth が『序曲』第三巻 (540)、十三巻 (71) などで一、二度使っている“under-soul”, “under-presence”, 即ち De Selincourt が「現代なら “the subconscious self” と呼ばれるもの」と評した想念を念頭においてのことと思われる。^⑰なお両者とも韻律の点には触れていない。

“Under-presence”はおくとしても、「光、海、大気、空を^{すみか}住処とする霊的存

在」が、さらに「人の心の中に住まう」ということは、単なる並列だけではなくて、その霊的存在が宇宙万象という住処すみかごとそっくり人の心の中に住まうという構図を極めて暗暗裡にはあるが想像させる。あの早朝散策の少年が“holy calm”に包まれると同時に外なる光景が内なる眺望と思われたのと同じ様に、万象と人の心とが、霊的存在を媒体にして、互いに包み包まれる関係になり、そこには、『ヨハネ伝』（10：38；17：21, etc.）に幾度か見える「父よ、あなたが私の中に在られ、私があなたの中に在りますように」（As thou, Father, art in me, and I in thee ...）という想念の余韻が聞き取れるようにも思われる。そしてこの靜的な様態を、動的な相において捉えたのが上の一節の結びの数行である。

「思惟するもの全て、思惟の対象たるもの全てを生動させ、万象を貫いて巡りわたる、あるそよぎ、ある霊」という詩行の“thinking things, ... of all thought”が頭韻を踏んでいることは別としても、それが“seeing things”や“of all sight”ではなくて「思惟」であるのは、さきに触れた自注の「外なる事物が思惟 (thought) の中へと落ちゆき、消えていった」という言葉の示唆する観想 (contemplation) の世界を想起させ、ここでも、外なる万象と内なる思惟とが霊のそよぎを媒体に重なり合っているのである。

『序曲』第十一巻（337）にもあるように、あの早朝散策の時のような夢・幻的な霊交体験は30代半ばの Wordsworth には折々の“glimpses”としてしか訪れなかったと言うが、自注や De Quincey の回想にもある通り、そうした幼少期の霊交体験を想像力の土壤に宿す Wordsworth の詩精神が、それに培われて、指笛の詩におけるような感受性を中年期にいたっても持ち続けていたことは、例えば1806年作の *Composed at Grasmere* の一節、

Loud is the Vale: —this inland Depth
In peace is roaring like the Sea;

Yon star upon the mountain-top
Is listening quietly.

(5-8)

濤々と谷あい^{とよ}は響もすーここ内陸深い谷は
平穩につつまれて海のように轟いている。
山のかなたの空遠き星は、
ひっそりと聞き入っている。

あるいは、1807年作の『ブルーム城祝典歌』 (*Song at the Feast of Brougham Castle*) の結びに近い一節、

Love had he found in huts where poor men lie;
His daily teachers had been woods and rills,
The silence that is in the starry sky,
The sleep that is among the lonely hills.

(161-164)

貧しい人々の横たう伏せ屋に、彼は愛を見だし、
日ごと日ごとの彼の師は森や小川、
はた、星空にあまねく沈黙、
ひそやかな山あい^{とよ}にただよう安らぎ。

などにも見られる。始めの詩は知人であった湖畔地方の親しい政治家 C. J. Fox の危篤の知らせを受けて書かれたもので、嵐の後の水かさを増した谷あいの情景から始まるのであるが、“depth” という一語が内陸と溪谷の深さのみならず、外海の深さをも暗示しているように思われ、わずか4行のなかに、内陸深い溪谷の安らぎを貫く川音、底知れぬ外海の轟き、遙かな夕空の静寂に包まれた星、などが一体となって照応し合っている。特に山頂の彼方の星の姿は、

数年後 De Quincey が見聞するあの峠での情景そのもののようである。またこの詩の結びの、

But when the great and good depart
What is it more than this—

That Man, who is from God sent forth,
Doeth yet again to God return?—
Such ebb and flow must ever be,
Then wherefore should we mourn?
(19-24)

だが、偉大な善き人々が身まかるとも、
そはひっきょう、このことに尽きようか—

人は、神から送り出されたのであれば、
いまふたび神のもとに帰るもの—
そうした潮の満ち引きは永遠につづこう、
ならばなぜ、嘆くことがあろう。

という詩行に見える「人は、神から送り出されたものであれば、いまいちど神に帰るのであり、そういう潮の満ち引きは永遠に続く」という一節は、上の外海の轟と響き合っているのである。そして、それはさらに先の *Immortality Ode* の「落ちゆくこと、消えゆくこと……」に続く一節（162-168）の、

Hence in a season of calm weather
Though inland far we be,
Our Souls have sight of that immortal sea
Which brought us hither,
Can in a moment travel thither,

And see the Children sport upon the shore,
And hear the mighty waters rolling evermore.

だから、穏やかな心^{なご}和む季節には、
我ら内陸遥かにあっても、
我らの魂は、今生の生命^{いのち}の根源たる
あの不滅の海を目撃し
一瞬にしてそこに到り、
幼な子たちがその浜辺に遊ぶを目にし、
強大な海が永遠に轟くのを耳にするのだ。

という詩行の「不滅の海……の永遠の轟き」を想起させるのである。

そして、このように見ると、指笛の少年の墓前にたたずむ詩人の想いは、様々に解されてはいるが、少年の魂とその内なる無限の空間の帰一する行方、即ち早朝散策の詩行でいう「出自根源」（what origin）に対する想いではなかったかと考えられるのである。

後の祝典歌は、バラ戦争の余波で領地を奪われた Lancaster の Clifford 卿が20数年にわたり羊飼いとて山野に暮した後、Henry 7世の即位（1485）により復権し、Cumberland のブルーム城など幾つかのゆかりの古城を修復したという故事を踏まえた詩である。この「星空にあまねく沈黙」は上の詩の“Yon star ... / Is listening quietly”の静けさに通ずるものであろうし、結びの一行の「ひそやかな山あいにある安らぎ」は先の早朝散策の情景の“holy calm”を想起させる。Darbshire 女史は結びの一行について、「普通の詩人なら“the sleep that is”とは言わないで“the peace that lies”と言ったであろうが、それでも‘good poetry’であっただろう」と評している。²⁹ ちなみに、Wordsworth はいわゆる「存在の“is”」を彼独特の的確で含蓄に富む文脈で用いることにかけても卓越してて、それが彼の詩想の深さと詩的感性の鋭さの一つの証でもあることは、しばしば指摘されることであるが、上の結びの二行

の“is”，とくに後の“is”，はその好個の例であろう。これらの詩行の「星空にあまねく静寂」も「ひそやかな山あいにとだよう安らぎ」も、詩人の心の無限の空間の内に在るものとして、情感を通して、そして静かなる眼と耳によって感知されている、としか言いようのないものを感じさせずにはおかない。Wordsworth の別の詩の言葉で言いかえるなら、それは、「思惟・観照する心」(the philosophic mind—*Immortality Ode*, 187) が、「人間というものの奏でる静かな、悲しみの調べ」(the still, sad music of humanity—*Tintern Abbey*, 91) を通して感知した「静寂」であり、「安らぎ」であり、「人間の苦しみから生まれる心とむ思ひ」(the soothing thoughts that spring / Out of human suffering—*Immortality Ode*, 184–185) であるといえよう。

Ⅲ（補遺として）

上にあげた Wordsworth 36, 7 才頃のこれら二、三の詩に触れたのは、それが指笛の詩の結びの一節の受取り方にもつながるからである。その意味でも De Quincey は大切な点に触れている。当時の一批評家 Jeffrey は、この詩の結びで詩人が少年の墓前に佇ずむのは、少年の指笛の巧みさを偲んでのことであったのか、という幾分子供じみた自問をしている。それにたいして De Quincey は、「少年とフクロウとの応答はこの詩のいわば〈枕〉であり、そこから緊迫した懸念の状況が生じ、その懸念から、森羅万象が少年の心の内なる無限の空間に啓示されるという情景が生じるのだ。この詩の眼目はこの最後の情景にあり、詩人が佇ずむその思ひは、その眼目に関わるものであり、その内容はこの詩自体から説き明かす外はないのだ」という主旨の論評を強調して語っている。²³

この詩の最初の草稿では、現在の“while he hung ... his heart ... his mind” (18, 20, 22行目) がそれぞれ“while I hung ... my heart ... my mind”であった

ことから、人称の移し換えにかかわらず、この詩は一貫した内面的な自伝詩であるとして、少年の死は、Lucy poems の場合にそう考えられることがあるように、詩人の内なる少年の死、即ち幼少期の自然との純朴な霊交の消滅を意味するものだとする批評家も、少なくない。²⁴ それはそれなりに説得力があり、全面的には否定できないであろう。が、この詩にはそれだけではない要素があるように思われてならない。

というのは、かりに少年の死を詩人自らの内なる少年の死と解するにしても、それは、「十才にもならないうちに」とあるように、それほど明確に時限を提示できるものであろうか。それに、Wordsworth が、内なる少年の死を暗示しているとするなら、それは、当然、人間に普遍的な真実として語ろうとしているはずであるが、それならば、その普遍的な真実は幼き死がそれを象徴する詩題の少年にだけ起こって、あとに残された他の少年たちには起こらないとでも解するのだろうか。

たしかに、自注にあるとおり、この詩の題材は幼少期にあるが、その主題は幼少期を越えた、より普遍的な人間精神の不思議さにあり、そのことは De Quincey の逸話が伝えるところであり、自注も示唆していることである。そして、Wordsworth は三十代半ばの峠での星空の体験の注釈として、この詩を援用したのである。また De Quincey の指摘するとおり、佇ずむ詩人の思いが、当然のことながら、この詩の眼目の啓示体験に関わるものであるならば、それは、少年の内面に開示されたあの無限の空間の行方、即ち、それが少年の肉体の死とともに何処へどうなったのか、という問いに他ならないと言えるのではなかろうか。それは当然の問いでありながら、普通では真に深くは問い続けられることのない問いであり、思いであろう。

また、幼小期の一挿話を語る語り手の詩人自らが話題の少年の墓前に佇ずむという枠組みの中で、語り手が話題の少年の内面をこれだけ我が事のように語るためには、(小説の作家が登場人物の内面を自由に想像するのとは違って)

語り手の詩人と話題の少年との内面体験が互いに共感し合い、共有し合えるものであるという暗黙の前提が必要となろう。それは、少年時代の詩人と話題の少年とが共にフクロウを鳴かせては、その内面体験を語りあったことが実際にあったかどうか、ということでは必ずしもなくて、より根源的、より普遍的な暗黙の了解であり、前提である。Lucy poems の中では *Three years she grew in sun and shower* だけが多少とも乙女の内面に立ち入る、というよりは、わずかに触れているように思える点がなくはない。例えば、「せせらぎの調べの生む美しさは、彼女の顔^{かんぽせ}に移りゆき……生き生きとした喜びの情感は彼女の姿態を堂々と丈高く育て上げよう……」という一節（25-36）もそうである。

“The stars of midnight shall be dear
To her; and she shall lean her ear
In many a secret place
Where rivulets dance their wayward round,
And beauty born of murmuring sound
Shall pass into her face.

“And vital feelings of delight
Shall rear her form to stately height,
Her virgin bosom swell;
Such thoughts to Lucy I will give
While she and I together live
Here in this happy dell.”

「深き夜の星々を彼女は愛^{いと}しみ、
おちこちのひそやかな野辺に
思うさ流れる小川のほとりで、
彼女はそうっと耳を傾ける一と、
せせらぎの調べの生む美しさは
彼女の顔^{かんぽせ}に移りゆくのだ。

「生き生きとした喜びの情感は
彼女の姿態を堂々と丈高く生い立たせ、
乙女の胸乳は膨らみゆく。
かかる思いを私は彼女に授けよう、
ここ幸せな谷あいには彼女と私が
共に住まうあいに。」

しかし、ここでは上の詩行の直後にあるように「かく自然は語りぬ」(Thus Nature spake.) という叙述法をとっているため、この指笛の少年の詩とは少し事情がちがうのである。Wordsworth は、さりげない叙景においてはいうまでもなく、神秘体験を語るときも、暗喩的、象徴的である一方で、ぎりぎりのところまでは極めて論理的であり、理屈っぽくすらあるのだが、その Wordsworth が人称の移し替えからくる上のような含蓄の推移に気付かないはずはないと思われる。

このように見ると、佇む詩人の思いの中には、少年の心の無限の空間の行方・帰趨にたいする思いと共に、そういう啓示体験の共感・共有を可能ならしめる根源的存在者にたいする思いが、重なり合って、あったのではないかと考えられる。それは行方・帰一であると同時に出自・源泉であるという意味で一つことだといってもよいであろう。即ち、先にみた『序曲』第二巻の「唯一の偉大な精神の代行者」というその「唯一の偉大な精神」、あるいは *Tintern Abbey* で「より遥かに深く遍在し……万象を住処として、人の心の中にも住まう者」、「思惟するものすべて、思惟の対照たるものすべてを生動させる霊」というその霊的存在にたいする思いである。

Wordsworth には、個々の人間の心が自我の殻を越えたものであるという思いが絶えずあって、それは一方では、上のような詩行はもとより、先にふれた“under-presence”や“under-soul”という想念にも現われているが、他方ではより日常的な表現で語られることもしばしばある。それは例えば、指笛の詩と

同じ頃に書かれた *The Old Cumberland Beggar* で、村を徘徊する老乞食が貧しい人たちからささやかな恵みを受け取ることによって、逆に施すことの喜びを彼らに与えていると語る一節（147-153）にも、「我らはなべて一つ人間の心を持ち合わせている」という素朴なかたちで現れている。

No —man is dear to man; the poorest poor
 Long for some moments in a weary life
 When they can know and feel that they have been,
 Themselves, the fathers and the dealers-out
 Of some small blessings; have been kind to such
 As needed kindness, for this single cause,
 That we have all of us one human heart.

いや一人は人に愛^{いと}しいもの。極貧の人々も
 倦み疲れた生涯で、時には自分たちすらも
 ささやかな恵みの親であり分かち手であったと、そう、
 優しさに飢えている人たちに優しくしたことがあったと、
 心から思える折々を待ち望んでいる、それも、
 我らはなべて一つ人間の心を持ち合わせている、
 というただ一つの故にこそ。

そして、先に見た *Immortality Ode* (1804) の「我らの生命の根源たる不滅の海」や、*Home at Grasmere* (1806) の結びにみえる「人の生命がそこから出ては、そこに帰る神（という永遠の海）の潮の満ち引き」という詩行では、その想念がしだいに信仰の色合いをおびてきているのが、みとめられる。

さらに、10数年後の『ダドン河ソネット連作』の結びの一篇（34番）*The River Duddon: After-thought* (1818-1820) では、いっそう正統に近い文脈の中で「我らは自らが知る以上に大いなることを感じとれるならば、心足りるのだ」という形で現れるのである。

I thought of Thee, my partner and my guide,
 As being past away. —Vain sympathies!
 For, backward, Duddon! as I cast my eyes,
 I see what was, and is, and will abide;
 Still glides the Stream, and shall for ever glide;
 The Form remains, the Function never dies;
 While we, the brave, the mighty, and the wise,
 We Men, who in our morn of youth defied
 The elements, must vanish; —be it so!
 Enough, if something from our hands have power
 To live, and act, and serve the future hour;
 And if, as toward the silent tomb we go,
 Through love, through hope, and faith's transcendent dower,
 We feel that we are greater than we know.

ダドンの流れよ、わが道連れ、わが導き手のそなたを、
 はや過ぎ去りしものと私は思っていた。一が、空しい思い入れだ！
 なぜなら、振り返り見ると、私には見えるのだ、
 かつて在り、現に在り、なおも在りつづけるものが。
 今も汝が流れはながれ、永久に流れゆくだろう。
 「形相」は在りつづけ、「営み」は死に絶えることはない。
 我ら、勇氣ある者、力ある者、知恵ある者、
 我ら人間というもの、その若き日には天地火水を
 ものとも思わなかった我らは、滅びゆくほかはない。一さもあらばあれ！
 もし我らの業から何かが生き残り、活動し、
 未来に役立つ力があるならば、また、寂寞の墓場に向いつつも、
 愛と、希望と、信仰のもたらす超驗的な恵みとを通して、
 我らは自らが知る以上に大いなることを
 感じとれるならば、それで心足りのだ。

前半ではむしろアリストテレス的な想念の片鱗が見えるのであるが、結びの
 一節の“love, ... hope, and ... faith's ...”は、言うまでもなく、正統信仰の三つ

の“cardinal virtues”である。このように見ると、指笛の少年の墓前に佇む幼少期の詩人の思いも、こうした想念の推移の途上で一様相であったと推測されるのである。（つづく）

（本稿は1991年11月2日京大英文学会における口頭発表「内と外と無限の空間—*There was a Boy* をめぐって—」に加筆したものである。）

【注】

- ① Text は、一篇の詩としては、*Poems in Two Volumes* (1815) 所収の詩稿が最も秀れているが、ここでは本論考の性質上、下記注②の De Selincourt 編 *The Prelude* の1805年稿に依る。最初の草稿と *Ur-Prelude* (1799) の草稿は25行目で終わっていて、後で触れるように18, 20, 22の各行では“while I hung ... into my heart ... into my mind”と一人称になっていた。それが *Lyrical Ballads* 第2版 (1800) 以降“while he hung ... into his heart ... into his mind”と三人称に変えられ、結びの9行が加筆されたのである。
- ② W. Wordsworth: *The Prelude* (1805 & 1850 Texts) ed. De Selincourt, Oxford U. P. 1959, p. 546.
なお、以下 *The Prelude* からの引用はすべて本 Text に依り、Wordsworth の他の詩は後注⑦の Oxford 版全詩集に依る。
- ③ *Ibid.* p. 547.
- ④ *Lyrical Ballads*, ed. H. Littledale, Oxford U. P. 1959; p. 214.
See also:
John Livingston Lowes: *The Road to Xanadu*, Vintage Books, 1959, p. 123.
- ⑤ S. T. Coleridge: *Biographia Literaria*, vol. II, ed. J. Shawcross, Oxford U. P. 1962, p. 6.
- ⑥ Christopher Ricks: *The Force of Poetry*, Oxford U. P. 1984, p. 111.
- ⑦ *The Poetical Works of W. Wordsworth*, vol. II, ed. De Selincourt & Darbishire, Oxford U. P. 1969, p. 436.
- ⑧ Geoffrey Durrant: *William Wordsworth*, Cambridge U. P. 1969, p. 32.
- ⑨ Paul de Man: *The Rhetoric of Romanticism*, Columbia U. P. 1984, pp. 52-54.
- ⑩ *Lyrical Ballads*, ed. H. Littledale, Oxford U. P. 1959, p. 238.
- ⑪ W. Wordsworth: *The Prelude* (1799, 1805, 1850 Texts) ed. M. H. Abrams, J.

Wordsworth, S. Gill, Norton Critical Edition, 1979, pp. 21, 80.

- ⑫ S. T. Coleridge: *Ibid.* vol. I, p. 202.
- ⑬ T. De Quincey: *Reminiscences of the English Lake Poets*, Everyman's Library, 1961, pp. 122-123.
- ⑭ *The Poetical Works of W. Wordsworth*, vol. IV, ed. De Selincourt & Darbishire, Oxford U. P. 1969, pp. 463, 467.
- ⑮ Helen Darbishire: *Wordsworth: The Prelude, Bks. I, II, &c.*, Oxford U. P. 1966, p. 61.
- ⑯ Thomas Traherne: *Centuries, Poems, and Thanksgivings*, vol. II, ed. H. M. Margoliouth, Oxford U. P. 1958, p. 349.
- ⑰ *Ibid.* vol. I, p. 94.
- ⑱ John Jones: *The Egotistic Sublime*, Chatto & Windus, 1960, p. 207. See also: John Jones: *John Keats's Dream of Truth*, Chatto & Windus, 1969, p. 11.
- ⑲ Donald Davie (ed.): *Selected Poems of W. Wordsworth*, Harrap's English Classics, 1962, p. 151.
- ⑳ Christopher Ricks: *Ibid.* Oxford U. P. 1984, p. 122.
- ㉑ De Selincourt (ed.): *The Prelude* (1805 & 1850 Text), Oxford U. P. 1959, p. 622.
- ㉒ Helen Darbishire: *The Poet Wordsworth*, Oxford U. P. 1962, p. 178.
- ㉓ De Quincey: *Ibid.* pp. 123-124.
- ㉔ 例えば Geoffrey Hartmann: *Wordsworth's Poetry 1787-1814*, Yale U. P. 1971, pp. 21-22. などにも見られる。